

漱石をジェンダーで読む

大東文化大学名誉教授 渡邊澄子



はじめに

かつて『特集 ジェンダーで読む漱石』（2005／6 『解釈と鑑賞』）を編輯した時、冒頭の総論に「私にとって漱石は古びることも筐底で眠ることもなく、切り口によって時代の尖端に即応した新たな魅力、思索の課題を提供してくれることで常に側にいてくれる人である」と書いたが、この思いは今も変わっていない。

漱石は「作家の態度」（1908／4）のなかで「教育の結果、習慣の結果、ある眼鏡で外界を観、ある態度で世相を眺め、さうして夫が真の外界で、又真の世相と思つてゐる」、月は丸いというが

それは「規約の束縛」によるので「世界は観様で色々に見られる」のだから「客観的態度」で「大胆な勇猛心を起して」「恐れず」に「如何なる立場から、どんな風に世の中を見るかと云ふ事」に作家の態度は「帰着」すると書いているが、では、作家としての漱石の態度はどのようなものだったのか。

彼の態度の根源は、学生時代に書いた評論「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」（1892／10）の、「長幼の序を論ぜず男女の性を問はず斯く其愛に偏する所なければ一種の人物を描出して之を崇拜する杯とは彼の夢に見ざる所」で、「平等の二字全巻を掩ふて

遺す所なし」を要とする思想にあった。今では『草の葉』のホイットマンを知らない人はいないだろうが当時は全く未知の詩人だったのを発掘し受容した慧眼、炯眼に瞠目されるが、漱石文学はホイットマンから得た種が育っていった過程と言える。

1867（慶応3）年生まれの漱石は、大日本帝国憲法、教育勅語、明治民法下で男造りされている。「富国強兵」政策は「家父長制度」とパラレルな〈国々天皇公〉の為に生きる〈男らしさ〉に対して、女はその男に尽くし支える『女大学』を継承した「良妻賢母」を規範とした女造りのされた時代だった。

男女それぞれのアイデンティティの核



漱石肖像

出自と生育——鷗外との比較

とされた規範は天賦人權論を封じ込めて男性中心社会を牢固なものとした。明治民法は女性を法的無能力者として女性の自我を認めぬ「良妻賢母」の徹底化だった。

ところで、日本近代文学の代表者はというとまず漱石・鷗外の名が挙げられる。5歳年上で文学活動もかなり早かったのに鷗外・漱石とされないのは何故だろう。百年以上も前の作品が、社会制度の百八十度転換した今、新聞に再掲されるのは、人生に相渉った漱石文学が時代を超えて生き続けているからの証明だろう。

丸ごと明治人として差別社会を生きた漱石が人間平等思想をわがものにし得た根源に出生・生育環境は無視できない。牛込区馬場下町（現新宿区）で生まれたいわば都会っ子で、名主だったが階級社会における平民の父夏目直克とその後妻だった母千枝の五男で、義姉2人、一、二、三男の後に生まれた4男・3女の夭逝で、三男とは9歳離れた母42歳の時の「恥かきっ子」の五男は夏目家にとって不要の子だった。

不要の子は里子から養子へと捨てられたが、養父母の離婚で生家に戻されたものの籍はそのままであったので父は彼を疎んじた。祖母と思い込んでいた母は14歳時に他界し、漱石は家庭愛の味を知らずに幼少年期を過ごした。

家長意識の培われなかったのは当然だろう。二松学舎から漢文では食べていけないとの長兄の忠告に従って成立学に移り、家を出て自炊生活をしながら大学予備門入学を果たし、後に満鉄総裁となった親友中村是公との共同生活を塾教師のバイトで凌ぐなど貧窮体験を持つ。

漱石20歳の時、長兄が結核で死去、翌月に次男も同病で没す

ると、早くから漱石の才質を認めていた長兄の進言で夏目家に復籍したのは21歳の時だった。その後東京帝大英文科に進み、めきめきと才能発揮することになる。

一方、並置される鷗外は地方・石見国（現島根県）津和野藩主亀井家の代々御典医を務めた医家（士族）の14代目として生まれた。父も祖父も外から入った人だったので鷗外の誕生は森家発展の礎とされ、「立身出世」が母峰の口癖となった。早くから文学に意欲を抱いていたが医学に進む宿命に従い、公費留学を目指して陸軍に入り、ドイツ留学を果たした。

日本近代文学に刻印される『舞姫』には留学中の鷗外が投影されている。「闘う家長」（山崎正和）とは言い得た表現だが、鷗外の肉親愛の強さ、鷗外に対する肉親の信愛度の高さは驚嘆される。

だが妻は他人で遺書では排除されている。帰国後、立身出世のために用意されていた海軍中将男爵赤松規良の長女登志子と見合い結婚するが、翌年、長男於菟が誕生するとその月に登志子を離縁し、再婚は13年後だがその間密かにセックス・ワイフ兒玉せきを囲っていた。

親友に「美術品」と形容して知らせた程の再婚相手の茂は美人だった。直ちに結婚して当時の勤務地小倉で約3か月の

蜜月を過ごす、ここでの生活を茂が鷗外入朱の「破瀾」に描いている。夫は既に42歳なので早く子をなして妻の地位を固めたかったのに夫が避妊をしていたことを知って激怒し、あんなにも可愛がってくれていたのは「おもちゃ」「慰み」としてだったのかと詰め寄る妻に、せっかく「生け捕」った「美術品」を妊娠・出産で髪が抜けたり萎びたりするのは惜しい、いつまでも「損ねない」ように「保存して」おきたかったからだ、前の妻は白文などもすらすら読む教養の高い女だったが美人じゃなかった、と言ったとある。

彼のいわゆる当時の現代文学に登場する主人公はすべて博士・教授だ。漱石の作品には東京帝大の教授と推測できる人物でも博士や教授の肩書きは一切付けられていない。高校（旧制）教授の留学第1号に選ばれた時も行き渋っている。

当時の社会的地位は比較にならぬほど高かった東京帝大教授の話を擲って朝日新聞社に入り、勅令による博士号授与をあくまでも辞退（拒否）し続けているなど権威主義には背を向けていて鷗外と相反する。二人の生涯は共に美事だが、生き方は正反対である。

作品をジェンダーで読む

近年、日常的に使われるようになった用語、ジェンダーとは内閣府男女共同参画局による「男女共同参画キーワード」として「ジェンダー（Gender）」を「社会的・文化的に形成された性別を『ジェンダー』と表現します。生物学的な性別であるセックス（Sex）とは区別して使われます」と定義している。

文学をジェンダーで読むとはどういうことか。寸言で言えば、その作品にどれだけジェンダー・バイヤスがかかっているか、作者にどれだけジェンダー・バイヤスに対する問題意識が働いているかを読みとることで、研究者にも当てはまる。従来の文学史、文学論のカノンとされてきたものの多くがジェンダー・バランスを無視した女性下位視、男の好尚で読まれているのは、ジェンダー・バイヤスのかかった男性が書き手だったからであろう。男女平等の民主主義社会になって70年を閲しながら今なお達成には程遠い現実にある。

148年前に誕生し99年前に没した漱石の文学を女性問題に焦点を当てて読むことで、現代を考えるよすがとしたい。

作品を順を追って読むことで、漱石の人間観やこれと連動する思想の変化を跡づけられるが紙幅の制限上不可能である。それは拙著『男漱石を女が読む』に譲って、作家を生きることになるなど思いも寄らなかった段階での第一作『吾輩は猫である』（以下、『猫』と略記）と、まさか来年死ぬとは予想し得なかったのに最後の完成作となった『道草』によって、表層的にならざるを得ないが、漱石文学のエッセンスを述べることにしたい。

『吾輩は猫である』（1905・1）06・8、『ホトトギス』

子規系『ホトトギス』に依った仲間や弟子達の集まりの、持ち寄った作品を朗読して批判し合う山会で、高浜虚子に勧められて1回だけのつもりで書いた写生文細叙法の作品だが大好評で11回まで続くことになった漱石の小説の第一作である。

「吾輩は猫である。名前はまだ無い」の書き出しから「特異」「空前」「絶後」の「珍しい作品」（磯貝英夫）だが、第1回の主人公は猫で、猫の痛烈な視点からこの家の主人と書生と「金縁眼鏡の美学者」が名無しで描かれ、名の出ている



『吾輩ハ猫デアル』表紙

のは「代言」の家の三毛と、無教育の「車屋」の乱暴な黒だけである。

「笑いの文学」とも位置づけられていて、巧みなユーモアが楽しい。回を追う毎に主人が珍野苦沙弥でその友人の美学者が迷亭、他に哲学者の八木独仙、苦沙弥の教え子の物理学専攻の水島寒月、寒月の友人で詩人の越智東風、金満家の実業家夫人の金田夫人、昔の自炊仲間の鈴木藤十郎、苦沙弥の家の元書生の多々良三平などのほか重要な役割の与えられている苦沙弥の「細君」が主な登場人物だが人物の絡み合いや物語の展開が錯綜していて寸言で梗概は書けない。女の問題

を中心にポイントを述べることにする。まず、従来の評価を挙げておこう。

「はなはだペシミスティックな展望」、「サデイスティック」なほど「極端な女性不信」、女性への「憤怒、憎悪の激しさ」、漱石自身の夫婦関係を「戯画的に概括」したもので、「女性不信や女性蔑視」の念を噴出させた作、などと位置づけられてきた作品である。

『猫』執筆中の今から110年前の05年の「断片」に、「現代ハパーソナリチーの出来ル丈膨張する世なり而して自由の世なり。自由は己れ一人自由ト云フ意ナラズ。人々が自己ノパーソナリチーヲ出来ル限り主張スルト云フ意ナリ。出来

る丈自由ニ出来得丈ノパーソナリチーヲ free play ニ bring スル以上は人ト人との間ニハ常ニテンションアルナリ」と記している。前後関係から「人」には女性も包含されていることが分かる。06年の「断片」には「Life is literature」とし

て他の学問では「貧、多忙、圧迫、不幸、悲酸、不和、喧嘩等」は「敵」でなるべく避けようとするが「文学ハ二の其者」ゆえ、「苦痛、悲酸、人生ノ行路ニアタル者は即チ文学」なのだから「進ンデ此中ニ飛ビ込」まねばならぬともあって、文学者としての態度、覚悟が示されている。

『猫』には苦沙弥家の夫婦関係が随所に描かれている。ほんの少し例を挙げてみよう。

苦沙弥が迷亭と寒月に妻を撰津大掾を聞きに連れて行き損なったことを話す場面だが、「いつも叱り付けたり、口を聞かなかつたり、身上の苦勞をさせたり、子どもの世話をさせたりする許りで何一つ酒掃薪水の勞に酬いた事」がないので、せめて「年に一度の願」を叶えてやりたいたいと思ったのだが、いざとなったら悪寒がきて連れて行けなかったと笑わせる。

ここには、作者が妻に苦勞をかけている当事者が自分であることの認識が示されている。「細君」は普段は寡黙で裁縫好きなので女性として優等生だが発達したパーソナリティーの持ち主なので、「オタンチン、パレオロガス」などと抑圧的に言われると黙っていない。飽くまでも意味を追及する。その他の場面でも

理不尽な対応には堂々と対抗する。針持つ手を動かしながらあけっぴろげに夫の偏屈ぶりを迷亭と話し合ったりもするが刺も悪意もないので不快さはない。自画像を投影された夫の悪口を言わせているのは、作者がその悪口を認めているからであり、妻の不満に気付いているからでもある。この夫婦の常態の一齣を挙げてみよう。

細君は主人に尻を向けて——
——なに失礼な細君だ？別に失礼な事はないさ。礼も非礼も相互の解釈次第でどうでもなる事だ。主人は平気で細君の尻の所へ頬杖を突き、細君は平気で主人の顔の先へ莊嚴なる尻を据ゑた迄の事で無礼も糸瓜もないのである。ご両人は結婚後一ケ年も立たぬ間に礼儀作法杯と窮屈な境遇を脱却せられた超自然的夫婦である。

まさに家父長制度を越境した夫婦関係の様態である。猫の目による主人批判箇所も多いが、それは作者の自己省察、自己批判でもある。寒月と金田の娘との縁談の話題の延長で、迷亭が「奥さんのや



岡本一平画 「漱石先生」

うに別に思ひも思はれもしない苦沙弥所に片付いて生涯恋の何物たるかを御解しにならん方には……」と言いかけたのに対して「あら何を証拠にそんな事を仰しやるの。随分輕蔑なさるのね」と反発する妻に、「主人も正面から細君に助太

刀する」。漱石と同世代の清水紫琴だけで無く30歳も若い（1873年生まれ）宇野千代まで、母は敷居を隔てて手をついてでなければ父と話も出来なかったと書いているが、『猫』の妻は、夫の許に来る客の前に夫と同席して、時には話に割り込んで笑ったり茶々をいれたりしているが、それを主人は自然体としている。妻が夫と同じ土俵上でやりとりするのが悪妻説の根拠にされているが、それこそ、女性差別者の視点だろう。

女性問題が集中的に論議される終回（十一）は読み手の人間平等観が試される場面で極めて興味深い。『猫』に登場する知識人達が全員集合して、外表的には無責任なおしゃべりだが、中身は笑いで韜晦させてはならぬ個性論から結婚論に及ぶ先進的論で、なかでも漱石も投影されている迷亭の語る「未来記」は見逃せず、その後の作品に引き継がれていく重要な問題が多い。

「細君」が留守での放談に一区切りが付いた頃、迷亭がそろそろ奥さんの帰宅する頃だから止めた方がいいとみんなを制した時、みんな聞いてましたよと言わんばかりの「細君」の咳払いに「こいつは大変だ。奥方はちゃんというぜ」に、「ウフ、ハ、構うものか」の主人の言葉

は妻の人格を蔑ろにしたものではなく、「窮屈」を「脱却」した「超自然的夫婦」の両者了解済みのことであることは、「今のはね、御主人の御考ではないですよ」と笑いをこらえながら言う迷亭に多分クスリと笑いながらの「存じません」の妻の反応は一座を愉快がらせただろう。パーソナリティーの発達は「一身一体」「夫唱婦随」を消滅させ、それぞれが自我主張するようになるので、離婚や非婚が多くなるだろうと現代を先取った説も展開されていて、抱腹させられながら思索を迫られる奥深い小説になっている。

『道草』（1915・6・3～9・10
『東京朝日・大阪朝日新聞』）

作家を生きようなどとは思ひもしなかったのに『吾輩は猫である』の大好評を契機に小説を書き始め、権威の象徴ともいふべき東京帝大教授の地位を擲って朝日新聞社に入社し『虞美人草』で職業作家を歩み始めるまでの助走期における短編をも含めると、漱石は死までの12年間に22編の作品を遺している。

この間の評論・講演及び断片、日記、書簡まで包含すると発言量は夥しい。それも宿痾の胃病で何度も入院（一度は30

分の死を体験）を繰り返しながらである。第一作の『猫』には漱石文学のエッセンスが既に盛り込まれているが、漱石文学のエポックメーカーキングは『それから』『行人』だろうと私は考える。完成されれば『明暗』が頂点作になったと思われるが残念ながら死によって未完に終わった。完成作の最後の作『道草』は、すべて虚構による小説手法の整合性を破って、かつて批判的だった自然主義的私小説の要素を持つ、漱石にしては型破りの特異な作品である。

英国留学から帰国後、第一高等学校と東京帝大に教職を得た漱石36歳から2、3年が一応作品世界になっているが、そこに、名の出た漱石にたかりに養父が現れつけまといわれたのは1907年頃からだろう。百円を渡して縁を切った09年4月のことを織り込んで結んでいるが、執筆段階の状況もそれとなくとりこまれていると思われる。

主人公健三は36歳に設定されている。漱石の36歳を事実にして言えば意欲に燃えていた時期で次々と作品を発表しているばかりかこの年から以後五児が誕生している。ところが作中の健三はとも36歳とは思われない。

フランスのある学者による死の間際に

過去の記憶を描き出すとの説を挙げて、自分がその立場にあると考えるほど馬鹿でもないがとありながら、しきりに過去に「煩らはされる」ばかりか「はなはだしい倦怠」「疲労」の激しさの自覚が繰り返され、それは、全102回中57回に及ぶ。このことを指摘したのは拙論においてだが、漱石に無意識・無自覚ながら死が予覚されていたように思われる。

最後の完成作である『道草』を、漱石の思想と換言可能な漱石文学到達点を示した作品と見てもいいのではないかと私は考える。紙幅の制約上、踏み込めないが、この作の直前に当たる時期の発言「私の個人主義」と「硝子戸の中」にはそこを示唆する要素が見られる。

前者で人間と人間の平等関係の主張である「自己本位」の基本的前提としての「個人主義」が論じられ、後者では自己の生涯を客観的に振り返りながら、「私はまだ私に対して全く色気を取り除き得る程度に達してゐなかつた。嘘を吐いて世間を欺く程の術気がないにしても、もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の欠点を、つい発表しずに仕舞つた」とあり、『道草』はまさにその書かれた作品になっている。

第1回の冒頭は「遠い所」から帰った

健三はその国の臭いが付着していることを「忌」みながら「其臭いのうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた」とある。洋行帰りの自負を「気が付かなかつた」は気が付いていたから言えたことである。全編がこれまでの自分の客観視であり批判であるとも言っている。

養父島田に出会った事に始まり、金を渡して一応の決着がついたところで終わる物語構成になっているが、その間に強欲な養父、喘息に苦しむ読み書きの出来ない姉、健三が牛乳代として毎月渡している姉への小遣いさえ取り上げて妾を囲っているらしい遊び人の夫、人員整理の対象になることを恐れている下級官吏の兄、養父に続いて現れた養母等々、著名になっている漱石の面目を失するような描かずもがなの人物をも登場させながら、健三お住の《家庭》を通して夫婦（男女）問題を自省的に追及した作品である。

不快な記憶しか無い養父島田の待ち伏せめいた出会いから物語は始まるが、「その人」「その男」等と17回も使われながら名前が出されないのは如何に会いたくなかった人物だったかを示すが、この不快な出会いを妻に話そうとしない。

相原和邦の「二人の折合の悪さは、第

一章から表示されて作品全編を貫く基調音であり、この作品のどこにでも葛藤場面を見い出すことができる」は定説化されたこの作品の読みになっている。さらに挙げれば、夫を軽蔑しているお住が信じているのは金と子どもだけ（三好行雄）、「平日」に描かれた鷗外の家以上にこの夫婦は荒寥としていてクサンチックを取り扱う態度がみられる（石崎等）などのほか、鏡子悪妻説として読まれている。

だが、読む角度を変えれば逆になる。どんなに理不尽、不合理だろうとも絶対的上位者の夫に逆らつてはならないのがこの時代の「良妻」だった。だがお住（鏡子）は違つた。

我慢、忍耐が極点に達すると発症する「歇斯の里」の原因が自分にあることを健三は気付くようになり、発症すると「跪いて天に祈る時の誠と願」から講義中も気が気では無く帰宅すると明日の講義の準備も出来ずに妻の枕元に付きそい続ける「慈愛の雲が靨鬱」くと、その優しさに反応して妻のヒステリーは沈静化していく。融合を求める努力が自分中心の健三に通ぜず「索漠を深め」「寒そうに席を立つ」妻の姿に、「何故自分の妻を寒がらせなければならぬのか」と「外表的になれない」自分を省みる。

妻の産に対する述懐に、産は妻の義務と考えていたのが、拷問のような苦しみの中かで自分の子を産み、抜け毛を淋しそうに見つめる姿に、自分が罪人のように思われ、今年の冬は特別寒いという妻に、産で沢山の血を流したからだよ、と労る健三に男権・夫権の横暴さは無い。ここに描かれるのは、妻に注がれる慈愛の眼差しである。

男権・夫権を植え込まれた男造りされている漱石の自画像である健三の変化の過程は感動的である。普段は寡黙だが言うべき時ははっきり言うお住を評価する場面は随所にある。夫だから尊敬しろはおかしい、尊敬される人物になるのが先決だという妻の論理に「不思議にも学問をした健三の方が此点に於て却て旧式」だったのほか、この種の場面は枚挙に遑ないほどで、「葛藤」でできる夫婦像こそ評価されるべきだろう。この作品の要と言える、

自分は自分の為に生きて行かなければならないといふ主義を實現したがりがら、夫の為にのみ存在する妻を最初から仮定して憚らなかつた。

「あらゆる意味から見ても、妻は夫に従属すべきものだ。」

二人が衝突する大根は此所にあつた。

「衝突」は喧嘩である。この時代に喧嘩の出来る夫婦は異例だろう。この作品は、自分に生きたい生き方があるならば相手にある筈で、自分の自己本位が大切ならば相手の自己本位も尊重しなければならぬ、の平等思想を掴んだ作品として、『道草』は突出した価値を持つ。悪妻どころか、鏡子を妻としたことで開眼を得た、漱石文学の新鮮さである。

(2015年3月12日・公開フォーラム)

講師略歴(わたなへ すみこ)

東京都生まれ。日本女子大国文科卒、同大学院文学研究科修士課程修了。大東文化大学名誉教授。文芸評論家。

著書『野上彌生子研究』(八木書店)

『野上彌生子の文学』(桜楓社)『女々しい漱石、雄々しい鷗外』(世界思想社)『日本近代女性文学論』(世界思想社)『評伝 與謝野晶子』(新典社)『青鞥の女・尾竹紅吉伝』(不二出版)『林京子ー人と文学』(長崎新聞社)『野上彌生子』(勉誠出版)『男漱石を女が読む』(世界思想社)『負けない女の生き方』(博文館新社)『気骨の作家 松田解子』(秋田魁新報社)他。編著・共編著多数(略)

東京港クルージング見学会のお知らせ

国際善隣協会が主催する東京港クルージング見学会が、6月19日(金)13:30から行われる。東京都港湾局所属の「新東京丸」を貸し切って、東京港内を巡り、国内外から運ばれる生活・産業資材の集荷拠点やガントリークレーン、ゲートブリッジなどを参観する。

開催日：6月19日(金)
13:30~15:00

参加費：無料

集合場所・時間：竹芝小型船ターミナル 13:00集合
(JR浜松町駅から徒歩約15分、ゆりかもめ「竹芝駅」から徒歩5分)

申し込み締め切り：6月10日(水)

乗客名簿作成のため早めに氏名、所属を国際善隣協会事務局までお知らせ下さい。日本・中国の学生グループ、友人関係者も歓迎します。船内では軽い飲み物、下船後お茶会を行います。

国際善隣協会

